

文窓

ふみのまど

発行
平成17年10月20日

第3号

神戸大学文学部同窓会

会長: 安部 栄治

事務局

〒657-8501

神戸市灘区六甲台町1-1

TEL (078)881-1212(代)

FAX (078)803-5529



ご挨拶

文窓会会長 9回生
安部 栄治

この度、平成17年4月23日に開催されました評議員会(役員会、幹事会)において、はからずも会長に選出されました。申すまでもなく微力ではありますが、文窓会の発展のために努力したいと考えていますので、よろしく願います。

顧みますと、平成14年11月の定期総会において24年ぶりに広瀬新会長が選出され、役員も一新し、15年11月の臨時総会では会の名称を「文窓会」とした新たな会則を決め、同時に同窓会誌「文窓(ふみのまど)」を創刊するなど、今後の発展の基盤となる改革が着々と進められていました。その矢先、16年11月の定期総会において広瀬会長が突然辞任されましたので、やむなく任務を引継ぐことになった次第です。

神戸大学は平成16年4月1日から「国立大学法人神戸大学」となり、独立機関として自己責任で運営されることになりました。教育や学術研究の特色、成果は厳しく評価され、他大学との競争も激化し、事と次第によっては今後の盛衰にかかわりかねません。特に文学部は現実社会での存在感をいかに示すかが課題ではないかと思えます。その場合、文窓会は観客ではありえません。子供の将来は親を見れば見当がつく、と言われますが、やや大げさに申しますと、文窓会員一人一人の活動が文学部の将来に影響すると言えるのではないのでしょうか。

すると、文窓会としては今まで以上に学部当局と連携し、それぞれの活動を相互に支援して、文学部の発展につなげていく必要があると思います。また同時に、神戸大学全学部の同窓会で組織されている“校友会”との協力も欠かせないものと考えています。

さらに大事なことは、会員相互の親睦をはかり、文窓会の会員であることに誇りを感じられるようにしていくことであると思っています。東京支部、東海支部の発展にも期待しています。

皆様のご指導とご支援を切に希望します。



神戸大学文学部同窓会 「文窓会」の皆様へ



文学部長・文化科学研究科長

文窓会名誉会長 松嶋 隆二

文学部同窓会の皆様、お元気でご活躍のことと存じます。文窓会の会報誌にてご挨拶を申し上げてから一年が経過しました。この間、文窓会東海支部が設立されました。わざわざお招きを頂きながら、国際高等研での会合と重なり、お祝いに駆けつけることは出来ませんでした。お詫び申し上げます。今後、いろいろな地域でご活躍の同窓生が集う集まりが盛んになることと期待いたしております。

法人化二年目の今年は、ばたばたして落ち着かない雰囲気もかなり消えてきたようです。いまだ、難しい課題が山積しておりますが、厳しい財政事情の中でも、何とか文学部の独自性を発揮して行くしかないという覚悟が出来てきたように思えます。

その具体的な現われをひとつだけ紹介させていただきます。それは、「海港都市文化学」の創成を目指す研究組織が出来、活動が開始されたことです。

数年にわたる地道な海外拠点大学との協同シンポジウムを通じて、「東アジアにおける海港都市をフィールドに、人と文化が接触し、特色ある地域社会が構築されてゆく過程に焦点を当て、異邦人や異文化の境界(インターフェース)の間で起こる葛藤をいかにして乗り越えてきたかを具体的に明らかにする」国際的共同研究を始めようという声が高まってきておりました。ちょうどその折、多くの関係者の努力と支援により日本財団から財政支援を受けることが決まり、共同研究を支えるため、6月15日に神戸大学文学部海港都市研究センターを設立することが出来ました。このセンターでの活動の中には、学生や大学院生の参加を前提とした様々なプログラムが組み込まれております。そのひとつが、この研究活動を通じて若手研究者を育てるということでありました。

今年は、戦後60年の年に当たります。東アジアにおいて日本の過去の振る舞いに関する記憶が呼び覚まされ、事実かどうかとは関係なく、それが、大きな外交問題になりかけました。過去の忌まわしい記憶は、自然に消えてゆくように思われがちですが、PTSDでも言われているように、何周年というような特定の時期に症状が出たり、記憶がよみがえったりします。人間の記憶というのは、強い情動や好悪の感情が伴うとき、このようなことが顕著に見られます。そのようなことが地域紛争にまで発展することは、今日でも見られることです。その意味で、異邦人が融合し安定した地域社会を構成してきた過程を研究するというセンターの掲げる研究テーマは、大変意義のあることと思っております。現在の若者が異国で活躍する際、このような認識のギャップによる無用の衝突と戸惑いをなくすためにも重要な研究と考えられます。同窓生の皆様には、我々の試みを温かく見守り、ご支援頂ければと考えます。

臨時総会開催報告

■平成16年11月20日 ■参加会員35名

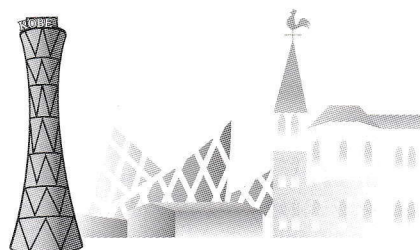
大学法人化に伴い、同窓会の果たす役割が重責を占める中、平成15年後半頃より『学友会（全学部の同窓会で構成）として何ができるのか - 在学生の就職活動への援助 -』を討議する学友会の会議が度々開催された。今までの学友会の在り方に疑義を抱く広瀬会長は、学友会の席上で『先ず会則の変更を始め根本的な改革を成し遂げることが先決である』との発言を強固に繰り返した。

しかし同調者は少なく、会議は進展せず、やがて中断状態になった。大学側も心配し、役員会において善処して欲しいとの要請もあり、文窓会の役員会で何度も話し合った結果『是正点は確かにあるが、会長は自分の意見に固執せず、事を進めながら徐々に改革の提案をしていこう』という結論に達した。

しかし、会長は役員会の意見に耳を貸さず、『わたしの考えが正しい事の信任を受けたい』との会長の緊急提案にて、臨時総会を開催する事となった。

2時間余の討議の中、会長の考えに理解を示す意見もある中、信任を得たと考えた会長が、反対する役員の変更を発表しかけたとき『それはおかしいのでは』との会員からの意見が出ると、突如『わたしの意見が受け入れられないのでは、会長を辞任します。事後のことは一切知らない』との強硬発言を繰り返した。多くの慰留の声も出たが、会長辞任の意志堅いまま、総会は閉会した。

閉会后、ランスボックスにて、囲碁で有名な西村修氏（8回生）の『人生と勝負』の講演を聴きながら、懇親会を催した。この会にても、会長慰留の声も多数出たが、本人の辞任意志堅く、事後処理は残った役員に任されることとなった。



COTENTS.....

ご挨拶・神大文学部同窓会「文総会」の皆様へ	1
臨時総会開催報告	2
神戸大学文窓会（文学部同窓会）－会計報告－	3
第1会幹事会開催	4
文窓会支部の発足	5
文窓会先生特集	6～7
神戸の文学部で学んだこと	8～9
国立大学法人化から1年半	10
ジャワジャカルタ百首	11
文窓会会員より	12～13
東京支部だより	14
インフォメーション	15
神戸大学学友会について	
文窓会ホームページ充実をめざして・編集後記	16

神戸大学文窓会（文学部同窓会） — 会計報告 —

平成16年度収支計算書（平成16年7月1日～17年6月30日）

収入総額	10,562,769	（当期収入 4,983,929）	
支出総額	6,755,102	（当期支出 6,755,102）	
差引	3,807,667	（当期差引 △1,771,173）	

17年度予算書 （17・7・1～18・6・30）

収入	8,807,667
支出	8,807,667
	0

収入の部	16年度予算額	16年度決算額	差異	17年度予算額
会費納入金	4,500,000	3,840,000	△ 660,000	4,000,000
協力金	500,000	39,000	△ 461,000	1,000,000
利息金	500,000	944,099	444,099	0
總會々費	0	93,000	93,000	0
雑収入	0	67,830	67,830	0
前年度繰越金	5,578,840	5,578,840	0	3,807,667
収入合計額	11,078,840	10,562,769	△ 516,071	8,807,667

支出の部	16年度予算額	16年度決算額	差異	17年度予算額
会議費	150,000	153,525	3,525	150,000
事務印刷費	100,000	47,606	△ 52,394	80,000
通信交通費	150,000	108,120	△ 41,880	120,000
交際接待費	250,000	165,825	△ 84,175	250,000
協力金費	1,300,000	1,098,000	△ 202,000	1,300,000
（学友会費）	200,000	(136,000)	(△ 64,000)	(200,000)
（活動援助費）	200,000	(162,000)	(△ 38,000)	(200,000)
（学術助成費）	900,000	(800,000)	(△ 100,000)	(900,000)
会報費	1,500,000	1,632,695	132,695	1,800,000
歓送迎会費	650,000	565,710	△ 84,290	500,000
（卒業生対象）	500,000	(444,710)	(△ 55,290)	(500,000)
（入会生対象）	150,000	(121,000)	(△ 29,000)	(0)
總會幹事会費	0	205,140	205,140	150,000
事業活動費	1,300,000	740,000	△ 560,000	1,000,000
慶弔費	100,000	32,026	△ 67,974	100,000
雑費	50,000	6,455	△ 43,545	50,000
積立金	3,000,000	2,000,000	△ 1,000,000	2,000,000
予備費	2,528,840	0	△ 2,528,840	1,307,667
支出合計額	11,078,840	6,755,102	△ 4,323,738	8,807,667

平成16年度財産目録（平成17年6月30日現在）

科目	金額	
I 資産の部		
（1）通常会計流動資産		
現金	146,169	
普通預金	1,000	
普通貯金	1,444,698	
郵便振替	2,215,800	3,807,667
（2）特別積立金		
定期預金	10,010,000	（みなと銀行）
定期預金	4,000,000	（中央三井信託銀行）
定額郵便貯金	2,000,000	（郵便局）
“ “	3,204,000	（郵便局）
“ “	3,000,000	（郵便局）
II 負債の部		22,214,000
（1）流動・固定負債	0	0
III 正味財産合計		26,021,667

事業年度に係わる決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

平成17年7月26日

会計監査 **中川一三** 印

会計監査 **永田良** 印

第1回幹事会開催

平成17年4月23日 神戸大学文学部会議室

出席者 役員6名 監査役1名 幹事15名 (欠席者 監査役1名 幹事10名)

議事録

司会 池上副会長

安部会長代行挨拶

平成15年4月新役員発足以降の経緯報告と平成16年11月広瀬会長から安部会長代行への移事情事の説明。

鞍井幹事長

体調不良のため幹事会1年遅れのお詫びと幹事就任快諾の感謝とお礼。今後の全面的な協力の要請。

- ① 国立大学法人化に伴う同窓会の有り様の変化。文窓会と文学部、文窓会と大学、文窓会と他学部同窓会、文窓会と学友会・KUCなどとの関わりと協力の必要性の説明。
- ② 文学部において理念的に産学協同の難しさを踏まえたうえで、尚且つ同窓会は単に従来のような懇親会に留まらず大学・学部・学生と協力し、あるいはバックアップし、学部の発展に寄与する存在にならざるを得ない状況を説明し、幹事会の存在も従来とは異なるものとの認識が必要である。
- ③ 特に学部出身の専任の先生方には、全員幹事をお引き受けいただくよう改めてお願いする。(当日の質疑応答でも、学部先生の幹事とその他の幹事とでは、同窓会の意義について温度差が感じられました)
- ④ 副幹事長、「文の窓」編集委員、事務局委員などの就任協力をお願い。諸行事への積極参加のお願い。

自己紹介と質疑

- ① 特に広瀬前会長より安部会長代行への移行について質疑多々。
- ② 同窓会会員の自覚と関心の問題。
- ③ 今後の文窓会の路線などに、活発な質疑応答がなされた。
- ④ 他組織との連携と学部への協力の必要性を、共通認識とすることの同意確認する。

評議員会

司会 池上副会長

※会則第6条6「評議員会は役員と幹事会でもって構成し、総会に代わって議決する。その場合、幹事は評議員となり議決権を有する」ところにより開催。

会長の選出

安部栄治会長代行を満場一致で、新会長に選出する。

新会長の挨拶

決意表明と今後の全面的協力を要請

その他

- ① 東海支部設立式典に役員参加の報告
- ② 文窓会々員数 (16年3月現在) 総数 5,625名
内、学部卒業 5,019名、大学院卒業 1,236名
(他大学より606名)【内、物故者 181名】
- ③ 今後の名簿作製、取り扱いについては、個人情報保護法の施行に伴い他学部同窓会、大学とも協議し検討したい。

広尾克子氏 副幹事長を内諾

西村美佐氏 「文の窓」編集委員を内諾

文窓会本部 役員・幹事

会長	安部 栄治 36社	幹事	西田 裕 45社
副会長	日高 健一 36芸	〃	広尾 克子 46芸
〃	池上 淑子 43社	〃	林原 純生 48国
〃	中西みな子 47英	〃	北井かつよ 51英
会計	花木 直彦 36日	〃	藤井 勝 53社
監査	中川 一三 31芸	〃	鈴木 義和 55国
〃	永田 良 32国	〃	市澤 哲 58日
幹事長	鞍井 修一 36国	〃	奥村 弘 58日
幹事	片村 恒雄 35国	〃	山本 和明 61国
〃	木下 健一 36英	〃	橋口 徹 63比
〃	塩路 哲朗 36社	〃	田中 康二 63国
〃	上田知恵子 37国	〃	河島 真 3日
〃	以倉 紘平 38国	〃	松下 正和 6日
〃	五孝 隆実 42東	〃	寺林 香之 12哲
〃	吉田 浩次 43社	〃	佐藤奈緒子 13芸
〃	柴田 千晶 43英	〃	西村 美佐 13哲
〃	中川 和弘 44社		

文窓会東海支部の発足

支部長 萩 紀 男

このほど文窓会東海支部が発足した。これは大変喜ばしいことである。しかし、行きがかり上図らずも引続きお世話をさせていただくことになった私にとっては、重責が一層身にしみて、誠に不安な気持ちで一杯である。もとより、私の力だけでは何事もなし得ないであろう。けれども見渡してみると、文窓会には優れた方々が沢山いらっしゃる。そうした方々のお力をお借りすることが出来れば、よい成果が得られるに違いない。ひたすら皆様の暖かいご協力を心からお願いする次第である。

さて、昨年、春、国立大学は特別行政法人となった。これは、ある意味では、好むと好まざるにかかわらず市場原理が大学に導入されることでもある。今後は、大学間の競争と淘汰が一層進むと予想される。それに伴い、同窓会の役割も変わらざるを得ない。最早、同窓会は単なる親睦会ではあり得ない。これからは、大学を支える重要な柱の一つとして機能することが求められるであろう。

ひるがえって文窓会の現状を見てみると、残念ながら経済力、人的組織力において劣性を認めない。しか

し、古来、弱点を長所に変えることで難局を切り開いた例は幾つもある。志を高く持って、倦まず弛まず、足元を地道に着実に一步一步踏み固めて行くことが、迂遠に見えても結局は一番の近道であることを、私たちはすでに知っている。今、当支部が真っ先に手がけなければならないことは、人的ネットワークの構築であろう。同窓会活動の基礎をなすものは、人的組織以外にあり得ないと考えるからである。手始めに来年の総会には、今年に倍する人々の出席をお願いしたい。そのためにはどうすればよいのか、皆さんのお知恵を拝借しながら、真剣に考えてゆきたいと思う。ご意見をお寄せいただければ誠に幸いである。

尚、去る4月17日の設立総会で決定された文窓会東海支部発足の内容は、次の通りである。

記

規 約

1. 本会は、文窓会東海支部と称する。
2. 本会の会員は、文窓会のうち愛知、三重、岐阜、静岡の各県のいずれかに在住するか、もしくは職場を有する者とする。
3. 本会には、次の役員をおく。役員の任期は2年とし、再任は妨げない。
支部長 1名
幹事 愛知県2名、その他各県は各1名。
4. 年一回総会を開催する。
総会では、会員の中より選んだ講師による講演会を併せて開催する。

また、役員は次の通り決定された。

支部長 萩 紀男 (国 文 昭35年卒)
幹 事 佐藤 和徳 (社 会 昭42年卒 愛知)
鷲野 元 (東洋史 昭42年卒 愛知)
成瀬 勝美 (英 米 昭37年卒 岐阜)
河原崎 弘 (英 米 昭35年卒 静岡)
三谷 竜彦 (哲 学 平 8 年卒 三重)

神戸大学三重学友会が1月23日発足

会 長 伊藤吾郎 (凌霜会三重県支部長)
次回開催予定
平成18年1月22日 (日) 津市洞津会館



ホテルサンルート名古屋

文窓会 先生特集

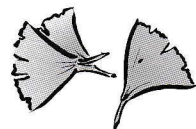
真

夏の夜の繰り言

哲学専修 山本道雄 教授

ある有名大学の医学部教授の著書に、「人間は考える葦である」がデカルトの言葉として紹介されていた。これまた有名大学の理学部教授はさすがにこれがパスカルのものであることをご存じだったが、しかし先生によればパスカルはギリシア時代の哲学者であるらしい。かつてC. P. スノーは文系と理系の分断を深く嘆いた。同僚のイギリス文学の教授達が理系の教授について、連中はシェークスピアすら読んでいないと悪し様に罵ったところ、では君達は熱力学の第2法則を知っているかと、両道の達人であるスノーは逆襲して見せたものだ。それから約50年後、わが国では事態は冒頭の有様である。しかしこれをもって理系の人々の無教養を笑ってすますことはできない。だってそうでしょう。うえのような無知をそのまま見過ごした編集者たちは、おそらくは人文系の出身だろうから。理系・文系を問

わず基礎的教養の崩壊は深く進行している。専門知で身を固めてはいるが、内面性と感受性の欠けたゾンビのような若者が増えつつあるのではないか。ゆとり教育や大学の教養教育改革とかがこの傾向に拍車を掛けているのではないか。しかし年寄りの繰り言はこのくらいにしておきましょう。考えてみればわれわれ世代にしても、大先輩からすればゾンビのような存在だったのだろう。小生の無教養にいたってはまことに汗顔の至りだ。涼しくなったら熱力学の第2法則でも学びなおすことにしよう。



最

最近の卒業論文

国文学専修 林原純生 教授

余白を借りて、最近の学生達の卒業論文について、書かせていただきます。私の専門は国文学の近代です。私が学生の頃は、夏目漱石か森鷗外かというのが、卒論の対象として、いわば定番でした。指導教官が明治文学の権威であった猪野謙二先生であったということもありましたが、大江健三郎や吉本隆明、そして埴谷雄高などを同時代の文学として読みながら、やはり、研究とか論文ということになると、先の両者の文学に挑むというような意気込みが、一般に学生達のなかにあったということでしょう。しかし、何時からかは、卒論の対象はすこしビックリするほど多様化しました。村上春樹で卒業論を書くことは、今では、むしろオーソドックスな例で、山田風太郎で卒業論文を書きたいと学生が申し出た時は、さすがに、文学作品の読者として、また研究者としても私自身の意識の古さを感じ

させられました。私の卒業論文のテーマは森鷗外です。生意気盛りの私が、猪野先生に、その旨を申し出たとき、先生が「君には藤村をやってもらおうと思っていた」と言われたことを思い出します。そして、藤村を読まなければいけない、という猪野先生の言葉が念頭を去来するたびに何回も人生にありました。藤村を研究対象としていたら、私はもう少し、人生の機微を理解できる人間になっていたかも知れません。そういえば島崎藤村を卒業論文の対象として選ぶ学生は、今はほとんどいません。これは教師の怠慢のせいです。



数年前の夏

英米文学専修 齊藤重信 教授

数年前の夏。急にフランスのある場所を訪れたいくなり、ほとんど下調べも準備もせずに、パリへ。翌日、TGVでボルドーへ。ホテルへ落ち着くと、翌日の列車の便を確かめるために、駅で手に入れた時刻表を開く。地方路線の、しかも、目的地が小さな駅とあって、そこに停まる便は、午前中は、7時台前後の2便のみ。翌朝は早起きをして、ボルドー駅へ。目的地までは、約1時間。ということで、目的地に着いてから、ゆっくり朝食をと思い、ボルドー駅では、クロワッサンの一齧りと、エスプレッソだけ。7時過ぎに、ボルドー駅を出た列車は、8時過ぎに、目的地の駅に。しかし、降り立ったのは、私一人。しかも、ホームには人影はまったくなく、駅舎は、ドアに錆び付いた鍵がかかったままで、廃墟同然。駅には、駅員もいなければ、売店も、カフェも、バスの停留所も、タクシー乗り場もない。まさに無人駅。目につくのは、ホームや線路のいたるところに生えている雑草のみ。その雑草が、なぜか、意地悪く、空腹感をつのらせる。しかたなく、駅の周辺へ足を向け、しばらく歩くと、人声を耳にしてほっ

とする。吸い寄せられるように、そちらに足を向け、雑談にふけていた地元の人間らしき二人から、目的地への道を聞く。ついでに近くにカフェはないかと聞くものの、返ってきた言葉は、ノン。空腹からできるだけ心をそらせるように努めつつ、ゆるやかな上り坂の道を目的地へ向けて歩き始める。しばらく歩くと、あたり一面、ぶどう畑。通り過ぎる車もほとんどなく、まして、歩いている人間には一人も出会わない。空腹と疲労にいささか不安になりながら、幾度か足を休めつつ、1時間ほど歩くと、道の前方に、案内板らしきものが見えてきた。近づくと、Montaigneという文字がなんとなくやさしい風情で佇み、モンテーニュの城館 (le Château de Montaigne) へと誘っている。それから、しばらくして、ついに、私は、モンテーニュの塔 (la Tour de Montaigne) の中にいた。塔の中の階段を上っていると、幸福感がたちまち空腹と疲労を追い払ってしまう。少し緊張して、三階の書齋に足を踏み入れる。『エッセー』 (Les Essais) が生まれた部屋だ。

大学史の編集に携わって

神戸大学百年史編集室 河島 真 講師

大学史の編集室に勤務することになって7年目になります。この間、『神戸大学百年史』全4巻のうち3巻の刊行に携わり（最後の1巻は編集集中）、おかげで神戸大学の歴史については相当詳しくなりました。私が生まれる前に亡くなった母方の祖父が神戸高等商業学校（法・経済・経営学部の前身）出身であったことは祖母からよく聞いていましたが、仕事を通じてその祖父の卒業論文が「売渡抵当論」なるものであったことを偶然知った時には、感慨深いものがありました。

大学史を通じて見た神戸大学像は、文学部の学生であった頃感じていたそれとは、明らかに異なっています。学部だけでも11を数える全国でも最大規模の神戸大学は、伝統や理念を異にする複数の前身学校を基盤としており、それが現在にまで息づいています。そのため、ややもすれば誤解により相互理解が困難な



神戸大学の歴史を紹介する常設展示。土・日・祝日を除いて神戸大学百年記念館1階の展示ホールで毎日公開しています（入場無料）。

場面に遭遇することもあります。異なった伝統や理念を内に抱えていることは、大学全体としての「力」にもなるはずで

そうしたことを、単に歴史の事実からだけではなく、仕事を通じて出会った多くの教職員、卒業生、市民の方々から学びました。歴史を検証する立場から神戸大学の今と今後を見守り、微力ながらその発展に貢献して行きたいと思っています。

神戸の文学部で 学んだこと

昭和32年 国文 名古屋大学名誉教授
山下 宏 明

「平家物語」論の行方とわたくし

1950年の春、文理学部に入学したわたくしは、自慢できる話ではないが、卒業するのに7年もかかった。英文学を志しながら、1年後に新設された国語国文学科に転科、そこへ療養による2年間の休学が重なったためである。この間、いち早く語学系の先生方の中で、日本文学協会、略称、「日文協」の支部開設の動きがあり、お誘いをいただいて参加し、加藤周一の雑種文化論を読んだ。新設の国文学科には、古典の荒木良雄・永積安明両先生、国語学の島田勇雄先生、それに教養部の笠井清・野中春水・井上誠之助先生、さらに定年を迎えられた荒木先生のあとに近代文学の猪野謙二先生をお迎えした。やがて文学部が独立するのだが、設備・図書ともに極貧の状態で、永積先生をして、ああ100万円の金があれば、せめて図書の充実ができるのにと嘆かせたのであった。とにかく源氏物語を読もうと、図書室から借り出したものの、後半がなく、やむなく別のテキストで読み通すというありさまだった。しかし、まず文学を学ぶとはどういうことかを考える上では、先生たちに恵まれたと言ってよい。1946年6月に発足した日文協の一拠点といった感があった。確か日文協が発足して間もなく、大会が東大で行われ、数名の友人と夜行列車で上京したのが、わたくしには、はじめての東京体験。永積先生の学問がどのような位置を占めるかも知らないわたくしに、当時の論客の話をお聴いてわかるはずもなかったが、その会場の熱気に打たれたことは確かである。大会終

了後、お邪魔した焼け跡の中の永積邸から山の手線に乗るために歩いた道、あちこち空地だらけで、新大久保駅の、屋根もない階段を登った。上京する機会が多いが、JRで新大久保を通るたびに、この昔を思い出す。エンゲルスのバルザック論を文体に即して平家物語の作者の思想を検証しておられたのが永積先生で、いわゆる歴史社会学派の論客のお一人であった。生意気盛りのわれわれが、これも論客の一人だった谷宏さんの中世文学論と比較して得意になる日々であった。当時、とくに木曾義仲論がおもしろかったのだが、ヘーゲルのジャンル論を踏まえた歴史学の影響が強くて、これも歴史学の領主階級論が参画していた。外ならぬ永積先生が、しばしば、その歴史学からの脱却を口にされたのだった。その頃だったか、御影校舎の玄関で出逢った永積先生は、わたくしが、英文くずれであることに気づかれ、平家物語が世界の叙事詩の中でどのような位置を占めるかを考えるようにと示唆されたのであった。思いもかけず平家物語の基礎的研究である文献学に踏み込み、無理がたたって発病、いさぎよく肺部分切除の手術を受けたために、教員志望の夢は断たれ、やむなく大学院へ進学、その前の年に石母田正さんの名著、『平家物語』（岩波新書）が刊行されていて、改めて『平家』論を考えなおす機会が与えられた。実は、学部時代、井上誠之助先生の国語学演習で時枝誠記の『日本文法 口語篇』が取り上げられ、その言語過程説の洗礼を受けていた。島田先生を囲んでの『万葉集』輪読も貴重な体験だった。上京して先生方とはお別れしながら、神戸で



身につけたりベラルな姿勢が、専攻する『平家』論にも、たえず方法を疑ってかかるくせをつけてしまったようである。たとえば義仲英雄論をとって見ても、歴史学そのものにおいて領主階層論が後退、かわって権門体制内の自己変革論、それに従属する武士階層の職能論にまで様が変わりする。その場が不思議にも神戸を拠点に広がってゆくのだ。その先陣を切ったのが、今は亡き黒田俊雄、それに現役の高橋昌明さんらである。義仲を山国育ちの野人として、その行動性を評価しながら、結果的に京都文化押しつけになりかねない動向にあったことを考えれば、一種のオリエンタルリズムではなかったのか。もし義仲が南北朝時代に生まれていたらなどといった思いを禁じ得ない。

そこへ、音楽学側からの参入が浮上してくるに及んで、物語論の行方とともに、大きく様変わりする。もともと平家物語テキストの変遷のなかに物語をとらえようとしていたわたくしが、物語の成立や作者論からは離れて受容論へと進む。おりから勤め先の新村猛さんの誘いがある、日仏比較論の場に足を踏み入れる中で、もともと時枝の言語構造論に関心のあったわたくしが、この、音楽をも含む物語論へと、のめり込んでゆく。その過程で琵琶法師をめぐる宗教民俗学への関心から

修羅能へも目が開かれる。

国際的な場で知り合った、明治学院大学国際学部の、元、英文学者のマイケル・ワトソン氏と親しくなるのだが、氏が語り系の平家物語の物語論的研究で、オックスフォード大学から学位を取得するに至る。おりからわたくしが国文学の世界では、先に述べた歴史学との動きとも関連するのであろう、豊穣とも言うべきか、読み本系のテキスト

をめぐる王権論や文化史的な発掘が進められる。その中で語り系のテキストの読み、受容を考えるのがわたくしである。その際にどうしても外国、とくに欧米の物語論が射程に入ってくる。前記ワトソンの研究が、その一つの典型をなす。これも永積先生のおっしゃったこと、やがて国文学にもヘーシンクが現れるぞと。当時の柔道無差別級の覇者である。

これももしあわせと言うべきか、岩波の『文学』誌が70周年を迎え、求められて同誌掲載の軍記論を網羅的に読み直して、これまでの、わたくしの『平家』論の展望に欠落のあったこと、言い換えれば、その論の多様性を十分には理解できていなかったことに気づかされた。そうした中で、ここに述べたような『平家』論の変遷と多様性を国際化、学際化のなかで短いエッセイを書いた。それを読んだ友人が、まるで『平家』論の語り部だなどわたくしを評したのだ。そうだ、どうしてこのような歩みをして来たのか。それは、やはり神戸の文学部に学んだことだと思い知ったのである。自分の歩みをたえず相対化して見つめる姿勢を学んだのが、神戸大学の文学部であった。その同窓の人々が、この東海地域に200名もいるという現実。新制大学として極貧の中で発足した神戸大学文学部の裾野が、ここまで広がりを見せている。



国立大学法人神戸大学になって、1年半が経過した。大学運営の変化がようやく私たちにも浸透してきたようである。この間、見えてきたキーワードは、「大学マネージメント」「教職員の意識改革」「コスト意識」「地域連携・貢献」「情報の共有化」「IT化」「卒業生＝大学の財産」等である。まさに「あたまの民営化」であり、「官から民へのギアチェンジ」でもある。

例えば、その1つとしては「同窓会の活用」である。法人化になってよく私立大学と比べてどうかと、問われる機会が多くなったが、確かに有名な私立大学では「同窓会組織」が大学にとって力強い支援組織となっている。本学でも法人化後は、本部の事務組織の中に「社会連携課」（旧広報課）がリニューアルされ、広報等の他に「本学同窓会に関すること」を所掌する組織として位置づけられ、同窓会に関するいろいろな取組が進められている。

これからは、特に卒業生の活用についていろいろと考えていかなければならない。そのためには、卒業生へ大学の情報を送ることが肝要である。広報誌のみならず、ホームページの活用、更にメールマガジンの実施が有効である。昨年3月より、本学のイノベーション支援本部・連携創造センター

(本年10月よりベンチャー・ビジネス・ラボラトリーと統合し、「連携創造本部」としてリニューアル予定)から隔月で産学官民連携のためのメールマガジン(“KI-ACT” キーアクト)が発刊されており、この9月で第10号が刊行されている。また、本学校友会からも毎月メールマガジンが発刊され、卒業生の動向、同窓会の催事、本学のニュース等が掲載されている。

文学部では、平成15年度から「文学部だより(文学部の広報誌)」と「文窓(同窓会誌)」を文学部同窓会と連携して在学生の各保護者や卒業生にそれぞれ年1回送付し、今回で第3号を迎えることとなった。

卒業生は、大学の成果であり、財産である。大学にとっても本当に大切な学生は、卒業後も大学を顧みってくれる卒業生である。大学と卒業生の関係は企業と顧客の関係ともいえる。そのような卒業生で組織される同窓会は、大学の発展に大きく寄与されるものと期待できる。今後とも全学的規模で今以上に協力しあって共に発展していく必要がある。

今は国立大学法人にとって、非常に困難な時期に直面している。でも、「ピンチはチャンス」文学部の更なる発展を目指して、微力ながら頑張りたいと思っております。どうぞ卒業生、保護者の皆様、今後ともよろしくお願いいたします。

講演会のご案内

第

一次世界大戦青野ヶ原捕虜収容所

大津留 厚 教授

第一次世界大戦の時に、現在の小野市と加西市にまたがる青野ヶ原にはドイツ兵、オーストリア＝ハンガリー兵の捕虜収容所がありました。2005年11月5日土曜日に県立小野高校で神戸大学文学部の大津留厚が司会をして、この捕虜収容

所に関する講演会を行います。神戸大学発達科学部の岸本肇教授が体育史の観点から話をするのをはじめ、青野ヶ原の前に収容されていた姫路での捕虜たちの生活ぶりや日本の現代史における捕虜についての講演があります。奮ってご参加ください。

アルバの白トリュフ市

茶谷 直人 助手
文化科学研究科

専門：古代ギリシア哲学・医療倫理学 文学研究科哲学専攻1998年修了
文化科学研究科文化構造専攻2001年修了

「アリストテレス」と聞いて人は何を思い浮かべるだろうか？天動説や落体論に象徴されるような、疎ましき意味での前近代的「伝統」の権化か、はたまたプラトン流の理想主義に對置される現実主義の潮流の代表か。私の研究は、平たく言えば、前者のような手垢を剥ぎ取りながら彼の実像に迫り、改めてその現代的意義を模索しようとするものである。そして……。そうそう、テーマは自由とのことだった-ということで、一つ柔らかい話題でお許し頂きたい。アリストテレスは万事に過不足なき「中庸 (mesotês)」を生の模範としたが、どうやら私はepicurianである点で背進者であるらしい。食い(飲み)意地と都会脱出欲求に駆られてヨーロッパの地方を妻と共に巡るのが、私の楽しみの一つである。写真はその一コマで、イタリアの一大ワイン産地ピエモンテをある秋にレンタカーで巡った際、



立ち寄ったAlba村で催されていたMercato del Tartufo Bianco d'alba (アルバ白トリュフ市)である。

いいしれぬ強烈な香りが充満した白テント内で、屈強な白トリュフ狩人達が(といっても探り当てるのは犬だが)小石の如き自らの成果を競っている様は、実に壮観であった。僅かの一片でも個性を放ち人々を大いに満たすそれは、この世で最も効果的に存在主張を果たす物体の一つに数えられるだろう。私も少しばかり見習いたいものだが。



「ジャワ・ジャカルタ百首」

南 輝子著(42国文)

(ながらみ書房1890円)

来世また産む性ならば父を産み慈しみせむいとほしみせむ

衝撃的な歌集に出会った。この歌集は、終戦後のジャワ、ジャカルタで民衆の蜂起によって惨殺された父への鎮魂の調べである。

くろがねの骨を捜して溯る生焼けにされた黒い骨です

つるべ繰り放ちまた繰りチチヲカエセ唱へる姿勢でうおんおん汲む

作者の慟哭が響き渡る。そして慟哭は今、水の、風の、光の祈りとなってほどばしる。

ろくじふねん。渴き求めた水となり父は湧き澄む吾を潤さむと

悲しみのゆらめく底から湧いてくる光生みだす水の渦巻き

遠いひとの寝息のやうに雪がふるはなれた軀がつながらるやうな

重いテーマを表現する中から平和への希求を続ける作者の姿に人はもう一度生きることを問いただきたいと願わざるを得ないだろう。

評者 伊志嶺節子
(紅短歌会、日本歌人クラブ会員)

南輝子出版記念個展・津田和一 遺作展

オープニングライブ「板橋文夫ジャズピアノ」

06年1月15日(日)
場所:ギャラリー島田

お問い合わせ 南 輝子 TEL・FAX 078-967-3175
ギャラリー島田 TEL・FAX 078-262-8058

文窓会会員より

バンコク駐在雑感

英米文学科・9回生 中野 裕

第一回目のバンコク駐在のため、雲ひとつない碧空のバンコク・ドンムアン空港に降り立ったのは、1975年11月3日でありました。66年から始まった中国大文化大革命のさなか、長期出張十数回の訪中を終えてのタイ赴任でありました。革命歌・舞踊を毎日のごとく見聞し、毛語録を毎日学習した重苦しい生活から開放されてのものではありませんでした。ドンムアン空港は、田舎のひなびた空港であり、外観は当時の広州白雲空港と非常に似通っていましたが、大きく異なるのは、広州には、毛沢東主席の詩歌がところ狭しと垂れ下がって居り、緊張感が絶えずありましたが、バンコクには、緊張感が全くなく、フリーカントリー（Thai Land）の様相を呈していました。税関検査を終え、空港の玄関を出たが、あちこちが洪水になっていました、迎えに出てくれた先輩の説明では、11月からバンコクは乾期になり、雨が降らないが、北方800キロのチェンマイあたりで雨季に降った雨水が、メナム川を行きつ戻りつして、バンコクまで来た時期と高潮とぶち当たり、海拔ゼロメートルのバンコクの下水道を逆流して、街にあふれているとのことでありました。道路の両側には、今は無きクロンと呼ばれる川が流れており、ボート・艇の類の船が往来し、船での行商が行われていました。のどかな良き時代のバンコクでありました。今はこのクロンは埋められ、道路の幅は広がっています。クロンに逃げることの出来ない水が行き場を失って時には大洪水を起こしていました。雨季の洪水は年中行事でありました。高速道路が整備されてる現在、下の一般

道路を走ることも少なくなって来ており、洪水を見る機会が少ないのかもしれませんが。

タイはラオス・カンボジア・ベトナム・中国・ビルマと赤い色の社会主義・共産主義国に囲まれ、今にもピンク色に染まるような時代でありました。将にカントリーリスク100%と言われた時代でありました。その後の発展は東南アジアでとび抜けています。これは全て国民の絶大なる信頼・尊敬の念を集めている現在の国王プミポン国王・ラマ9世の影響によるものであることは周知の事実であります。タイ人は当時貧しいのに何故いつも微笑んでいるのか、疑問でしたが、生活してみても、タイは裕福な国であると思い始めました。物質文明の中に居る我々日本人から見ると貧しいと感じたのですが、豊穡な土壌を持ち食糧の自給自足が出来る国であり、海や川や池には沢山の魚が手をつかめるくらい居り、道端には野生の果物が生育し、布一枚あれば暮らせる国であるのです。仏教を支えにしたところ豊かな国であるのです。微笑みの国、東洋のベニス、仏教の国と一般に言われています。ベニスには水が多いので、タイを東洋のベニスと呼んでいると思うのですが、私は遺跡などの美しい文化遺産を持つナポリに似てると思います。この国に商社の駐在員として通算9年も駐在することになるとは夢にも思っていなかったのですが、今や第二の故郷と呼べるまでになりました。外国企業の進出により工業国になろうとしています。緑豊かな自然を保ち東南アジア最大の穀倉庫としてのタイの良さを何時までも残し、農工業国として、日本を含め世界の食糧の宝庫としてのタイ国であって欲しいと願うものであります。

最後にプミポン国王のご長寿をお祈りして。

大学生生活を振り返って

西洋史学専攻・53回生 仲井 久美

私は今年3月に神戸大学文学部を卒業し、社会人となりました。

在学中はあまり感じませんでしたが、普通なら本の中でしか会えないような先生方の話を直接聞けて、何でも質問できるなんて、すごいことです。

また、神戸大学に入らなければ出会えなかった人達もたくさんいました。

あっという間でしたが、大学で過ごした4年間に得たたくさんのものを、これから一生大切にしていきたいと思えます。

40

年ぶりの六甲台

読売新聞大阪本社取締役編集局長
東洋史学科・14回生 河内鏡太郎

不思議なことに卒業してから40年近くもたつのに、六甲のキャンパスに足を運んでいる。そのたびに文学部の建物を見つめる。老朽したが、記憶はあちこちに残る。あのころはミナトが眼前にあったように思う。視野は確かに狭くなっている。それでも往時と同じように汽笛が聞こえることがある。やはり嬉しい。

神戸大の法人化にあたって「経営協議会」の学外委員という大役を仰せつかった。大学が大きく変貌するときに、少しでもお手伝いできればと願う。本部での会議だけでなく、大学の施設を見学する行事や入学式にも参加している。

今年の1月17日、震災で亡くなった若者たちの慰霊祭に参列した。六甲台も雨になったが、式の直前、見事な虹がかかった。遺族はそれぞれの思いを「六甲の虹」に託していた。式のあと、ささやかな集いがあり、突然、折鶴を手にした女子学生が姿を見せた。涙をいっぱいにして、その心情を切々と

語った。遺族も、野上學長もだれもが、胸を熱くしながら聞き入った。泣きじゃくるその学生に思わず「心にしみるいい話だったよ」と声をかけた。震災から十年、亡き息子や娘の後輩の気持ちに、遺族たちの目は優しくなった。

95年当時、私は震災報道の指揮官をつとめていた。まだ瓦礫が熱をもっている時期に「神戸大生ひとり一人の死を追いかけよう」と指示をした。そして、2ページにわたって掲載されたその記事を読みながら、なんども泣いた。その記憶がよみがえった。

副学長の鈴木正幸教授や岩崎信彦教授とは、震災を次世代に継承してゆくためのプロジェクトで、ご指導をいただいている。大学と神戸市、読売新聞などが一体となって展開してゆく大規模な企画だ。これも夢想すらしなかったことである。大学との、文学部との付き合いはますます深くなる。坂道で考えてみる。なぜ、これほどいま、大学に通っているのかと。

大

学という場所から

社会学専攻・49回生 東 園子

私は、神戸大学文学部を卒業した後そのまま大学院に進学し、修了後は企業に就職しました。ですが、ジェンダー論を本格的に勉強したいと思い、退職して他大学の大学院に入学しました。「男女という制度」を研究するこの分野は、一度就職してから大学院で勉強を始める女性が多いそうです。

学校教育の間は比較的男女平等が保たれていますが、多くの女性は社会に出ると剥き出しの男女差別に直面します。そして、今まで大して意識しなかった性別というものが、社会の中でいかに大きな影響力を持っているかを思い知るようになります。

私も就職して、そして大学に戻って、大学の快適さを実感しました。もちろん大学にも多くの問題がありますが、男女平等という建前が（建前にすぎないとしても）機能していることが大きいと思います。

そのような守られた場所で培われるジェンダー論は、ともすれば多くの人の実感と乖離してしまう危険性があります。けれども、特異な面のある大学の環境が研

究に取り組む上で悪いとは思いません。私の研究室は女子院生も多く、同性愛者や「性同一性障害」で知られるトランスジェンダーの人など、様々な人が当たり前前に存在しています。そのような状態が成立可能なことを知っているのは、現在の差別的な状況を当然のように思わないために大切なことだと思います。今はジェンダー論に対するバッシングも激しいですが、それを必要とする人の存在も社会に出て改めて知りました。

働きながら大学院に通う友人は「今のジェンダー論は進みすぎている」と言います。私もゼミで明治・大正の女性論を読んで、今でも通用すると思いました。女性に対するまなざしは100年経っても大して変わっていないようです。

その一方で、難解とされる今の理論でやっとなつかまえられるような女性の現実もあります。

その両面を視野に入れながら、大学という恵まれた環境を生かして研究していきたいと思っています。

東京支部だより

同窓会および木曜会

1. 第三回神戸大学文学部同窓会（文窓会）

神戸大学東京凌霜クラブ2005年7月28日（木）15時より17時まで

出席者皆様の来し方の回顧と現況報告を頂き、卒業後、夫々の方が、素晴らしい人生を送って居られることに感銘を受け、和気藹々と非常に和やかな同窓会であった。今後とも皆様のご健勝をお祈り致します。

本部の安部会長からは、文窓会の現状の詳細な報告があり、国立大学法人となった母校に対して、文窓会として、協力しているとの説明があった。

来賓の高橋教授よりも、文学部として、国立大学法人になったのちも、本校に対し、他方面で協力尽力しているとの説明を受け、心強いと感じた。

高橋教授は、日本史学の権威であり、下記の（文学部担当の）木曜会の講師として、上京していただいたもの。ご出席の松浦先輩が、高橋教授の高校時代の恩師であることも、同窓会を盛り上げる一因でもあった。

2. 第35回神戸大学木曜会：18時より

文学部の担当であり、本校より高橋昌明・文学部教授をお招きして、講演をお願いした。

講演：「福原遷都について」高橋昌明・文学部教授

高橋教授の作成された美しい冊子「福原遷都 - 清盛の海の都 -」を基に、日本を代表する日本史学の権威者である先生の分かりやすいご説明で、1156年の保元の乱から、1185年の平氏の滅亡までを、福原遷都を中心に時系列的にお話いただき、更に和田京・福原城の平家時代の遺跡にまで事細かにお話を頂き、NHKの大河ドラマ「義経」を学術的に分析して貰い、平家・源氏の有り姿を十二分に理解することが出来、参加者の全ての人が感銘を受けた。担当幹事として、高橋教授に感謝の意を表するものである。

3. その他：

- ① メル友：現在手元にあるメル友の名簿には、90名の方が登録済み。
更にメル友の名簿の充実をはかりたく、メル友に加えて欲しいとの希望者は下記にメールを下さい。
- ② 文窓会東京支部として、今回イーメールで74名、ハガキで281名に案内を差し上げたが、返事なしが、イーメールでは42名、ハガキでは130名、計172名であった。ハガキは、第一回、第二回と返事のなかった方を除き、関東在住の平成13年度卒業生全員に郵送した。名簿は平成14年度作成分を使用して発送したが、住所不詳で返送のあった方が70名もあった。
- ③ 東京支部役員：支部長 小野幸次 （32年卒）
幹事 河野房子 （35年卒）
幹事 中野裕 （36年卒）

神戸大学東京凌霜クラブの上記会合には、文窓会の有志の方々が参加します。

東京支部連絡先

住所：〒223-0064 横浜市港北区下田町1-1-113

中野 裕

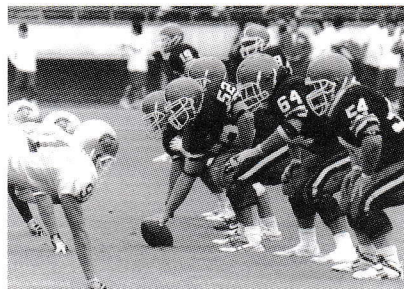
TEL&Fax：045-561-6317

E-mail：y.nakano@d9.dion.ne.jp

神戸大学体育会アメリカンフットボール部 RAVENS

文学部2回生 ディフェンスライン 浦久保 豊

はじめまして、文学部二回生の浦久保豊です。現在、我々神戸大学アメリカンフットボール部RAVENSは関西学生アメリカンフットボール一部リーグで、目標である「関西制覇」を果たすべく、「一戦必勝」のスローガンのもと日々厳しい練習に励んだ結果今シーズンの初戦である9月4日の京都大学戦に勝利しました。RAVENSは他の関西一部のチームとは異なり、学生主体のチームで頑張っています。社会人のコーチはいらっしゃるのですが、平日にはなかなか来ていただけないという事情もあり、練習メニューも選手自らが考えて作成し、練習後にビデオを見て自分達のできていないところを反省し次の練習に生かします。またチームの運営も学生スタッフが中心となり後援会やOB会の方々と連携を取りながら行っています。



RAVENSは今年で創部30周年という節目の年を迎えます。更なる飛躍を目指しこれからも頑張っていくしますので、是非ともご声援、ご支援を宜しくお願いします。

**協力金の
お願い**

**1回生(昭和28年卒)～36回生(昭和63年卒)の皆様
並びに37回生(平成1年卒)～53回生(平成17年卒) 入会金未納の皆様**

収支計算書をご覧いただければ分かるように、収入の大半は新入生の入会金です。

昨年はお願ひ致しませんでした、本来の姿に戻り同窓生の協力金にて運営致したく

1口3,000円(何口でも可)の協力金を、同封の振込用紙にてお願い申し上げます。

「神戸大学クラブ」(K・U・C)に入会しませんか

神戸大学卒業生が学部の壁を越えて、交流をはかり親睦を深める集いがK・U・Cです。神戸、大阪、東京で、それぞれ別々にいろいろな活動を展開しています。神戸K・U・Cは元町の牡丹園に事務所を置き、講演会、読書会、ゴルフ、旅行など、楽しい催しを実施しています。

ご入会ご希望の方は

078-334-1323 までご連絡下さい。詳しいパンフレットをお送り致します。

(K・U・C運営委員 日高 健一)



昭和36年卒業の皆さんへ

「神大卒業45周年記念の集い」が、平成十八年六月五日(月)ポートピアホテルにて開催されます。後日、詳しい案内状を差しあげます。楽しみにお待ちしております。

実行委員会文学部幹事

日高 健一

昭和37年卒業の皆さんへ

十日会 大阪・神戸

昭和37(10回)卒業生は全学部合同の同窓会組織を有し、毎月有志が集まっています。原則として十日に大阪で、十日が土・日にあたる月は神戸で開催しています。

お問い合わせは

青木 實(経済学部)まで。TEL 0798-63-5510

神戸大学学友会について

神戸大学学友会は各学部同窓会の相互交流と大学の発展に寄与するため、同窓会の連合体として組織され、各学部から選出された人たちによる幹事会で運営されています。

具体的な活動としては、幹事会や大学役員との懇談会のほか、大学広報誌（KOBЕ university STYLE）編集委員会、神戸大学クラブ（KUC）運営委員会、データベース委員会などです。現在、学友会を構成している同窓会は別表のとおりで、会長は新野幸次郎凌霜会理事長です。

平成7年度の第1回幹事会が5月13日に開催され、平成16年度会計決算報告、会則の見直し案、データベース委員会のあり方などが審議されました。

（安部）

神戸大学学友会を組織している同窓会

- 神戸大学文窓会
- 神戸大学翔鶴会
- 神戸大学紫陽会
- 社団法人凌霜会
- 神戸大学くさの会
- 神戸大学神緑会
- 神戸大学就進会
- 社団法人神戸大学工学振興会
- 神戸大学六篠会
- 神戸大学海事科学部同窓会

「文窓会のホームページ充実をめざして」

池上 淑子

平成16年4月1日に文部省による国立大学法人化が実施されて一年半が経ちました。各国立大学は、本来の高度な知育機関であることは無論のこと、少子化の傾向が続く中採算性も考慮しなければならないという未曾有の状況に取り組んでいます。無論神戸大学も例に漏れず、学問的業績を挙げる一方、企業や自治体とも連携して地域に開かれた大学としての活動にも意欲的に取り組みだしており、また従前個別的だった各学部間の連携が必要だとして、バラバラだった学部の情報の一元化をも視野に入れて動き始めています。総合大学としての全体的評価が問われる一方で、大学内においては、各学部が個別採算制となり、それぞれにその学問的独自性をアピールしなければならなくなってきました。文学部は、資本主義の現実社会の中ではどちらかといえば無駄な学問の場と見做されがちですが、価値観の多様化に伴う社会の流動化が激しい今こそ、分析的、複眼的な思考を育てる文学部の存在価

値が認められなくてはならないと思います。当然ながら文学部も学問的成果を挙げつつ、社会に開かれた学部として実績を積みつつあります。文窓会は、文学部充実を裏から支える一助として、また会員間の交流を深める目的でホームページ“文窓会”〔管理者 11回生 西村重和氏〕を開設しております。会員の出版物、講演、ユニークな活動や、そのほか面白そうで話題性に富んだ話などを是非ご寄稿ください。「文学部がおもしろそう！」というホームページになるにはコンテンツの充実が何より必要です。文学部をアピールし、また社会に役立つ後輩育成のためにご協力をお願い致します。

なお、文窓会のH・Pのメール・アドレスは

lit-alumni@kobe-u.com です。

直接H・Pに書き込むことは出来ません。上記のアドレスへ、メールかワード形式でお送り下さい。情報をお待ちしています！

編集後記

「文の窓」3号をお届けします。昨年は体調を崩し広瀬前会長他多くの方々にご迷惑を掛けてしまいました。国立大学の現況を鑑み、大学と同窓会の日常的親交を深めるため学部、学院卒業の先生方に新幹事を無理にお願いいたしました。また本号でも大学の現場の様子を皆様方に少しでもご理解頂くために同5名の先生、吉岡事務局長に執筆を依頼しました。如何でしたか？山下名古屋大学名誉教授（国文2回生）のお話と合せてお読み頂ければ興味もさらに増すのではないのでしょうか。

原稿をお寄せ下さったかたに心よりお礼申し上げます。次号も文窓会会員の声をどんどん取り上げていきたいと思います。共有したい情報、耳新しいニュース、出版刊行物の紹介、各期便り、ご意見ご感想などお待ちしております。

鞍井 記

題字：文学部教授 福長 進先生にご依頼しました。